

## (十一) 本学独自の組織

### 1. 宗教部

#### a. 理念・目的

##### 現状の説明

大学宗教部は、西南学院の建学の精神である「西南よ、キリストに忠実なれ」を、大学の営為のあらゆる局面において実践に移す中心的な担い手として活動すべく設置されている。そして、その理念を様々な宗教的活動を通して学生・教職員の中で、更には地域社会に向けての情報発信において、実践していくことを目的とする。宗教部は、教員系列では、大学の連合教授会において選出される宗教部長、その宗教部長が大学教員の中から選任する2名の宗教主任、更に各学部からそれぞれ1名ずつ選出される宗教部委員を擁しており、事務系列では4名の職員が宗教部事務室所属(学院宗教局兼務)となっている。

上述の理念と目的は、以下の活動によって実施に移される。宗教部の活動の中心は、学生・教職員のためのチャペルアワーの計画・実施である。時間帯は1時限目と2時限目の間の10時35分から11時までの25分間である。2000年度までは、毎週火曜日から金曜日の4日間チャペルがあったが、2001年度からは、授業週5日制の導入に伴って、火曜日から木曜日の週3回に変更となった。毎週チャペルのための週報『使者』を発行して、必要な情報を学内に提供している。このチャペルに連動して、春と秋の2回、時間を1時間に延長した『キリスト教強調週間』のチャペルを開催しており、そこでは学外の、実業界・文学界・芸術文化、そしてもちろん宗教の分野における著名なキリスト者を講師として招いている。主にこれらの講師によって、市民向けの公開講演会・演奏会をも開催している。年度末には、これらのチャペルにおける講話のうちの約10篇を再録している『チャペル講話集』を発行し、特にその年度の卒業生全員には無料で配布している。

宗教部は更に、様々な学生グループ活動を支援している。それらは、チャペルクワイア、ハンドベルクワイア、讃美歌を歌う集い、英語・ドイツ語・フランス語のバイブルクラス、読書会グループ、聖書研究をなす西南コイノニア、人形劇のゴスペルアクターズ等である。宗教部長と宗教主任は、毎年これらのグループの学生代表との懇談会を開催し、宗教部の概要報告を行うと共にチャペルの運営等について情報の交換をなし、学生の意見・要望を聞き、それらを反映するように努力している。宗教部長と宗教主任はまた、それぞれ週一回1時間半の自由面談の時間を学生のために提供して、学生の抱えている悩みや問題に関する相談に応じている。そもそも宗教部では、全学生の意見・要望等をアンケート用紙を用いて聴取することを、年度により様式を吟味して、隔年度初めに実施している。そして、それらに記載された事項に対しては、必要に応じて宗教部の回答を出してきた。新入生が入学してくる4月には更に、宗教部は小冊子『宗教部案内』を発行して、宗教部の活動についてのインフォメーションを全学生に提供し、更に『宗教部春の集い』を開催して、学生と教職員が一日かけて建学の精神について考える時間を持っている。宗教部は更に、春と秋に本学ランキン・チャペルに設置されている九州で有数の大きさを誇るパイプオルガンのコンサートを計画・実施しており、市民のために無料でオルガン音楽の鑑賞の機会をも提供している。このコンサートには、内外の著名なオルガニストを演奏者として招いている。

宗教部長と宗教主任から成る主任会は、月に1~2度の頻度で会議を開き、宗教部の様々な活動計画を立案している。更に各学部からの宗教部委員を交えての宗教部会議を各学期に一度開催して、より多くの意見を聴取することに力を注いでいる。特に後期の会議は、『宗教部リトリート』として一日時間を割いて意見交換の時を持っている。更に、これらの宗教部委員とキリスト教学を担当している教員との間の懇談会をも年に一度開催して、大学における宗教活動の在り方や、キリスト教学と宗教部の活動との連携の在り方についての話し合いの時を持っている。宗教部は更に、一年に一度、年度末に、『ファカルティ・リトリート』を開催し、全学の教員が、主として建学の精神やそれと関連する種々の事柄について話し合

づ時を設けている。

大学宗教部のみの働きではないが、学院が主催する「西南学院教職員クリスマス」や、市民のための「西南学院市民クリスマス」を、宗教部は積極的に支援している。また宗教部長は、その役職上、大学のキャンパス内に点在する形で聖書に登場する植物を植えた「聖書植物園」(管轄は庶務課)の管理・運営委員会の委員長を務めて、大学内に聖書の息吹が漂うように努力をしている。宗教部長はまた、大学の教育寮である男子寮と女子寮のクリスマス祝会には必ず出席して、祈祷・奨励をなしている。宗教部長及び宗教主任はまた、西南学院全体の宗教委員会のメンバーとして学院宗教委員会に出席して、学院全体の宗教活動充実のために努力をしている。

宗教部長と宗教主任はまた、学院宗教局が年1回主催する西南学院と地域の教会の牧師・伝道者との懇談会に出席して、学生たちが地域の教会において活発な活動をなすことができるような基盤をつくることに努めている。宗教部長と宗教主任は更に、全国のキリスト教学校教育同盟の主催する種々の集会に出席して、情報収集を行うとともに、他の大学における宗教活動の在り方を大いに参考にする努力をなしている。

以上に述べた宗教部の活動のほとんどは、宗教部のホームページによってPRがなされ、学生、教職員、市民への十分なインフォメーションの提供のための努力がなされている。更に、このホームページを見たうえで大学に寄せられる質問に対しては、必要に応じて宗教部からの回答がなされている。

#### 点検・評価

2000年度は計96回のチャペルが開催された。チャペルの平均出席者は151名と前年度(150名)に比べてわずかに増加した。チャペルに連結している号館が期工事中で妨げがあったにもかかわらず、延べ数で549名の増加であった。その背景には、チャペル・プログラムの充実(魅力ある週テーマの設定、様々な分野の専門家への講話依頼、賛美チャペルや、学生・卒業生の講話を増やすこと、ビデオを活用しての講話の導入等)があり、このことは積極的に評価してよいであろう。2001年度は計76回のチャペルが開催されたが、平均出席者は244名で、昨年度の平均出席者151名と比較すると、大幅な増加を示していることは肯定的に評価してよいであろう。宗教部関係者の判断では、この増加の理由として、神学部が西新キャンパスに統合されたのに伴い、神学部学生が積極的にチャペルに参加していること、文学部社会福祉学科の増設に伴い学生数が増加したこと、本学在学学生をモデルにした「いまチャペルにいます」のPRポスターが学生の間で好評であったこと、等が考えられている。今後、更に学生参加型のチャペルを増加し、より魅力的な週テーマの設定、講師の選択を考えていかななくてはならないであろう。しかし2001年度の宗教部関連の学生グループとの代表者との懇談会では、学生が親しみやすいチャペルテーマが設定されている、また学生の要望が採り入れられている、との意見が多く出され、宗教部の努力は積極的に評価されていた。チャペルにおいては学生が出席カードの裏に講話の感想やコメントを記入することが勧められているが、ほとんど毎回10~20名の学生が応答を記している。年2回春と秋に開催の「キリスト教強調週間」においては、ここ数年出席者が減少傾向にあったが、1998年度の平均出席者は268名と増加し、更に1999年度は302名と増加した。2000年度はいったん260名と減少したが、2001年度は、再び大幅に367名と増加している。また、通常のチャペルにおけるのと同様にかなりの数の学生たちが出席カードの裏に感想を書いているが(2001年度秋の1日目には50~60名の学生が応答を記していた)、それらのほとんどは大きな共感の思い、あるいは新たな決意を記している。このことは積極的に評価してよいであろう。授業週5日制に伴ってチャペルの回数が週4回から3回に減少してしまったことは残念であるが、依然として1時限目と2時限目との間のいわゆるゴールデンアワーがチャペルアワーとして提供されているということは、チャペルにおいて真摯に生き、神と人にと仕えて生きることへの促しを聴き取っていると思われる学生がかなりの数に上ることを考えれば、キリスト教主義大学として理想的な在り方を保持しているとして、大いに肯定的に評価してよいであろう。

問題は、最初からチャペルや「キリスト教強調週間」に全く出席しない無関心な学生たちが存在してい

るということであるが、彼らに対していかなるアプローチをなすか、更なる工夫が必要であることは言うまでもない。しかし他方で、キリスト教主義大学に在学していることの意味を彼らが自発的に考え始めてくれることを待つばかりではないという面もあるのは事実であろう。無関心、あるいはもっと積極的に反発なのかもしれないが、その背景としては、学生に被害を与えるような新宗教・新々宗教がらみの事件が発生して、若者の間に「宗教アレルギー」を起こしている可能性があるということも考えられるであろう。こうした問題については、学院が発行している新入生全員に配布される小冊子『西南学院とキリスト教』の中で、特にページを割いて解説がなされており、それへの解決策が模索されている。また、新年度のオリエンテーション時に原理運動や統一教会について注意を喚起する「西南学院に学ぶ皆さんへ」を配布している。チャペル出席者の増加のための様々な努力と工夫のひとつとして、1997年度から事務職員のチャペル参加が課長会議で承認され、チャペルに年5回を目処に出席することが奨励されるに至ったということがある。特に2001年度の秋季キリスト教強調週間チャペルや公開演奏会への職員の出席の増加は顕著であったので、そのことは積極的に評価すべきであろう。更に事務職員のみならず教員全般に対する働きかけが、チャペル参加への奨励や、クリスマス祝会・ファカルティ・リトリートの開催等によってなされていることも、積極的に評価してよいであろう。

宗教部とキリスト教担当との間の話し合いに関しては、授業科目としてのキリスト教の内容と宗教部が目指すところとの関係についての十分な議論がそこでなされているとは言い難い面があるように思われる。これは担当する教員の授業内容に踏み込むことがなかなか難しいからであろうと思われるが、改善を要することは間違いないであろう。

宗教部が学生の宗教的な活動を積極的に支援していること、また学生の精神衛生のための配慮として面談の時間を設けていること、学生の意見をも積極的に聴取しようとしていることは、肯定的に評価してよいであろう。宗教部に直属する学生グループ活動のうち、チャペルクワイアとハンドベルクワイアの二つは、学内の公式行事（入学式、卒業式、留学生別科の入学式、卒業式、大学キャンパスサービス、学院教職員クリスマス、学院市民クリスマス等）において演奏するという重要な役割を果たしている。更に人形劇のゴスペルアクターズも含めて、これらのグループは各地の教会・幼稚園や社会福祉施設を訪問する活動を通して積極的に社会に奉仕しているが、その奉仕は大いに評価されるし、学生自身の成長をも助けられていると思われる。市民のためのパイプオルガンのコンサートや、キリスト教強調週間等における公開講演会・演奏会、更に学院の市民クリスマス等の開催も、宗教部の地域社会への貢献として大いに評価してよいであろうし、更にホームページを通して寄せられる質問に宗教部が答えることによって市民とのコミュニケーションを図っていることも、積極的に評価してよいであろう。きめの細かいサービス、情報等を学内外に提供するためのホームページに関しては、まだその内容が十分とは思われないので、更なる充実・改善が望まれる。

#### 長所と問題点

長所は何と言っても、キリスト教主義大学としての西南学院大学の性格が、その長い伝統のゆえに人々の中に浸透しているので、その中心としての宗教部の働きに対しては、基本的には多くの人々の理解が得られているということであろう。問題点は、宗教部が多くの日常業務、主催行事、会議、新規業務等を抱えていて、事務局も含めて役職者がかなり多忙だということである。この問題は宗教部に限ったことではないのは明らかであるが、細かいサービスをすればするほど忙しくなるという問題は、何とかして解決されなければならない。業務の見直しや優先順位についての判断が迫られていると言ってよいであろう。より根本的な問題点は、上述の基本的な理解にもかかわらず、宗教部の働きが依然としてかなりの数の学生・教職員・市民の理解を得るところにまでは至っていないことである。チャペルに対する無関心、キリスト教教育に対する無理解がやはりあって、それが宗教部の働きの限界となっているという面があることは否定できないであろう。

## 将来の改善・改革に向けた方策

宗教部では現在、学生の海外ボランティアワークを計画・立案中である。例えば、信仰、人種、経済状況を問わず世界中の人々とパートナーシップを結び、住まいを必要としている家族と共に家を作る作業を行っている Habitat for Humanity International の奉仕に参加する形で、また、フィリピンに赴いて、国際飢餓対策機構の働きに参加する形で、10日間ほどのボランティアの仕事をすることによって、アジアの人々に奉仕し、同時に国際的感覚を身につけようとするものである。その実現は、学生たちの生き方の吟味や、国際社会に貢献するという建学の精神の目指すところについての熟考をもたらしてくれるであろう。また、神学部が西新キャンパスに統合されたことを契機に、神学部教員とキリスト教学専任者との話し合いを、より充実した形で持っていく必要があるであろうと思われるので、宗教部としてキリスト教学専任者・担当者との話し合いをはじめとして、学内における種々のレベルでの懇談会を重ねて、宗教部への更なる協力を要請し、建学の精神の具現化のために努力していかねばならないであろう。

## b.施設・設備等

### 現状の説明

2001年3月に新号館が完成し、3月中旬に本部宗教局・大学宗教部関係施設が移転した。全体的に充実した施設が提供され、チャペルアワーがもたれているランキン・チャペルが広い通路によって号館とつながることになった。一方、ランキン・チャペルの老朽化は、誰しもが認めるところである。当施設は、1954年に建築されたものであり、その後天井部分は改修されたものの、他の部分はずでに50年近い年数を経ている。

### 点検・評価

新号館の建設に伴い、宗教局長室、宗教部長室、宗教主任室、事務室、及び宗教活動室等が新設され、機能面、業務面においても有効な活用が可能となった。もっとも宗教部長室及び宗教活動室は若干狭すぎて、十分なスペースがないため活動に支障が出る事態が生じている。

ここ数年間にわたって宗教部が管理・運営してきたキリスト教資料展示室を新号館に設置することが、教室確保の必要のゆえに実現できなかったが、次善の策として図書館入り口の北側にコーナーを設けることにした。現在、収納棚の新規購入を申請しており、それによって、より効果的な陳列が可能になると思われる。ランキン・チャペルにおいては、パイプオルガンの残響効果を上げるために、天井の改修工事を行ったが、その結果として講話者の声が逆に聞きとれなくなったことに対しては、何らかの対策が必要であろう。当分は残響を最小に落とすため、マイクのほか放送機器を細かく調整するしかないであろう。チャペルに付随している暖房設備（ボイラー）も古く、噴き出し口（ファン）の騒音により講話が聞こえないほどであることもあったので、噴き出し口の調整を行い、講話が聞ける状態になった。2階席は、1階席とは異なって椅子を取り替えていないので狭くて窮屈である。将来新しい椅子に取り替える際には、前後の間隔を十分取る必要がある。ここ数年来言われてきた2階部分の建築上の危険性に関しては、大規模改修が必要との結果が出たので、早期の改築もしくは改修が必要である。

### 長所と問題点

ランキン・チャペルは、学院の諸行事（中・高の入学式・卒業式、大学の卒業礼拝・クリスマス関連の集会、学内・学外主催の公開講演会・演奏会等）や学生クラブ・団体、外部団体の使用、及びチャペル・オルガニストによる使用の頻度は高く、またそれに適しているのは長所である。2001年度には、入試課主催の大学訪問に協力する形でチャペル見学をも実施したが、好評であった。問題点としては、現学院内施設では、ランキン・チャペル以外に1,000名以上を収容できる施設がないために、使用希望が度々重なってしまうということがある。この点は善処しなければならない。また、冷房が設置されておらず、利用者からの冷房機器の設置を求める声が寄せられている。要望を受けて見積りはとっているが、ランキ

ン・チャペル取り壊しの時期、経費の問題もあるので、それらを考慮しつつ、問題の解決を図るべきであろう。

#### 将来の改善 改革に向けた方策

ランキン・チャペルの老朽化は歴然としており、早期の改修、建設が望まれるが、大学の第9次財政計画においてチャペルの建築計画(2005年度完成予定)が考えられているので、それまでは現状を維持する以外に方法はないであろう。新チャペルの建築に関しては、宗教部関係者の要望を十分に採り上げる必要があるであろう。新号館に関しては、案内板や掲示板の設置を更に考える必要があるように思われる。

#### c.管理・運営

##### 現状の説明

宗教部長、2名の宗教主任、宗教部委員、そして4名の事務職員によって宗教部は管理・運営されている。

##### 点検・評価

宗教部3役と各学部の宗教部委員とのより密接な連携を更に図っていく必要があると思われる。宗教部の働きを各学部の教員に正確に理解してもらうためには、宗教部委員の協力が不可欠だからである。その観点から宗教部会議の回数を増やし、具体的な問題点のより充実した協議を重ねる必要があるだろう。宗教部はまた、学院本部の院長や宗教局長、学院宗教主事との緊密な協力関係を維持していかなければならないが、この点でより充実した話し合いが必要であろう。2002年4月からは専任の学院宗教主事の就任が決定しているので、その点での改善は十分に可能であろう。宗教部は更に、西南学院中学校・高等学校の宗教部長・宗教主任、更に中学校・高等学校、幼稚園、保育所の委嘱委員と協力してキリスト教教育を推進していかなければならないので、今後とも宗教部は、学院宗教委員会の働きに積極的に参加・協力していく必要があるだろう。宗教主任会議は頻繁に開かれているが、この会議には3役と事務室職員4名、更に学院宗教主事が出席して、報告・協議・懇談を必要に応じて行っている。宗教部の点検・評価についてもそこで話し合われている。

チャペルアワーのうち木曜日の出席者が最も少ないが、これはこの曜日の1時限目にキリスト教学を含めてキリスト教関係の授業が全くないということが影響していると思われる。この日にキリスト教の授業を割り振られている学部にとって必修科目が1時限目に置かれていることが原因のようであるが、木曜日のキリスト教受講学部とチャペルのない金曜日の受講学部とを相互に入れ替えることによって、この問題は解決されるであろう。

##### 長所と問題点

宗教部が学院全体の様々なレベルでの話し合いを、すなわち学院、高校・中学、幼稚園における宗教活動についての話し合いを積み重ねることができるのは、大きな長所であろう。チャペル前後、特に1時限目の講義をもう少し多く開講してもらえれば、チャペル出席者も増す可能性があるので、この点は、時間割設定について、教務部と更に緊密な話し合いをなしていかなければならないであろう。

#### 将来の改善 改革に向けた方策

宗教部主催のオルガン・コンサートや公開講演会・演奏会の際に、必要に応じてアンケートの記載を依頼しているが、その中の要望や意見をより前向きに捉えて、宗教部の充実のために用いることが考えられる。教員を対象にしたファカルティ・リトリートに関しては、より多くの参加者を得られるために、一般の教員が親しみを抱けるようなテーマの設定を検討して、開かれた宗教部を目指す必要があるであろう。